

オシタ シゲトシ
尾下 成敏 教授

文学部 歴史学科

■ 研究業績等

【著書】

- ・著書 『京都の中世史第6巻 戦国乱世の都』 吉川弘文館（共著）:2021/08
- ・著書 『京都橘大学史料研究報告集第9集 16世紀京鞠会の基礎的研究』 京都橘大学文学部歴史学科（単著）:2020/10
- ・著書 『愛知県史通史編3 中世2・織豊』／『織田家の凋落と信雄・家康』、『戦国・織豊期の村落と農業・漁業』、『尾張・三河とキリスト教』、『戦国・織豊期の文芸』、『武家の生活文化』 愛知県（共著）:2018/03

【論文】

- ・学術論文 「戦国時代の中央文人と富士一見」 富士山学 雄山閣（2号）:20-26（単著）:2022/03
- ・学術論文 「戦国織豊期飛鳥井家の破子鞠の会について」 藝能史研究 藝能史研究会（234号）:1-16（単著）:2021/07
- ・学術論文 「戦国期東海地方の文芸と武家領主—北伊勢・尾張・三河の事例を中心に—」 研究論集 歴史と文化（6号）:51-70（単著）:2020/07

キーワード

和歌 連歌 蹴鞠 学問 武士

対応可能なもの 講演 研修 研究相談(学術指導) 学術調査 コメンテーター 共同研究・受託研究

乱世のなかの文芸

研究の概要

日本の16世紀と17世紀初頭は、長い争乱の時代であり、一般的には、武士を主役に据えて、この時代が語られることが多いように思います。また、そのような状況から、彼らについて語る場合は、戦闘に関わる行動がクローズアップされることが多いように思います。しかし、そうした語り方は、16世紀および17世紀初頭の歴史像について、誤ったイメージをうみ出す恐れがあるのではないのでしょうか。

文と武に注目して、この時代の武士の活動を見ていくと、彼らのなかでも支配者の側に属するいわゆる領主階層は、その多くが武芸の稽古や戦闘のほか、文事（文芸活動）にも力を入れた人々であった可能性があると考えます（和歌や連歌のような古典を基盤とする文芸を嗜んだ事例は、実に目立つからです）。とするなら、そうした彼らの文芸活動の実態を復元せねばなりません。また戦国の争乱が最も激化する16世紀半ばと、日本列島の争乱が終息へ向かう16世紀末以降で、文芸活動のあり方にどのような違いがあるのかを追う必要があるでしょう。こうした取り組みは、誤った歴史像の生産や流布の防止に役立つはずです。

表1 尾張に逗留した公家衆

人名	逗留期間	逗留の目的	経路	典拠
飛鳥井宋世(雅康)	明応8年5月17日 ～同月24日	富士一見(*1)	伊勢国→(尾張国)大野→小河→三河国→(尾張国)小河→三河国	「富士歴覧記」
飛鳥井宋世	明応8年6月17日 ～同月22日頃	上洛の途中での逗留	三河国→(尾張国)小河→伊勢国	「富士歴覧記」
転法輪三条実香	文亀2年4月10日 に下向の予定	不明		「実隆公記」
冷泉為広	永正10年4月12日 ～同月13日	富士一見	伊勢国→(尾張国)大野→成岩→三河国	「為広駿州下向日記」
飛鳥井雅綱	天文2年7月8日～ 8月20日	織田連勝・同信秀との交流	伊勢国→(尾張国)津島→勝幡→清須→美濃国	「言継兼記」
山科言兼	天文2年7月8日～ 8月20日	織田連勝・同信秀との交流	伊勢国→(尾張国)津島→勝幡→清須→美濃国	「言継兼記」
山科言兼	弘治2年9月17日 ～同月19日	駿河府中下向の途中での逗留	伊勢国→(尾張国?)志々島(*2)→三河	「言継兼記」
山科言兼	弘治3年3月15日 ～同月16日	駿河府中から上洛の途中に逗留	三河国→(尾張国)成岩→常滑→伊勢国	「言継兼記」

*1 文明十五年から永禄十年までの間、尾張へ入国した公家衆についてまとめた表である。また下線を引いた人物は、これまでの研究で尾張に逗留した事実、あるいは逗留しようとした事実が明らかとなっている。

*2 当初は駿河へ下向する予定であったが、結局は実現せず。

*3 志々島は豫島の可能性がある。豫島とすれば、尾張逗留の事柄となる。

研究の詳細

研究・技術のプロセス 研究事例 研究成果 使用用途・応用例 今後の展開

戦国時代の尾張国(愛知県西部)の歴史を見る上で、織田信秀は重要な人物です。信秀と言えば、有名な信長の父で、信長台頭の基盤を築いた人物として知られていますが、彼が文事に力を入れたことは、あまり知られていないように思います。具体的に言えば、信秀が和歌を嗜み、蹴鞠を愛好したことや、この時代に流行した連歌の愛好者である可能性が高いことを知るのには、日本史や国文学の研究者に、ほぼ限られるのではないのでしょうか。

私は以前、信秀・信長父子と和歌・蹴鞠・連歌との関わりを検討し、尾張の武士たちによる和歌と蹴鞠の受容が、同国内の諸勢力と東海地方の今川氏との関係に規定されていたことを明らかにしました(詳しくは、拙稿「戦国期の織田弾正忠家と和歌・蹴鞠・連歌」『織豊期研究』19号を参照)。これは政治過程の展開と、京都の公家文化受容の過程が結びつくことを示す事例ですが、こうした事例は他にもあり、今は、戦国・織豊期の政治過程と文芸史の展開過程との関連に注目しているところです。

表2 連歌師の尾張逗留

人名	逗留時期	逗留の目的	経路	典拠
宗長	永正13年7月	駿河へ帰国する途中に立ち寄る	伊勢国→(尾張国)常滑→三河国	「宇津山記」(836)・「那智籠」(837)
	大永2年夏頃	上洛する途中に立ち寄る	三河国→(尾張国)常滑→野間→伊勢国	「宗長手記」上
	大永4年6月7日～8日	駿河へ帰国する途中に立ち寄る	伊勢国→(尾張国)大野→三河国	「宗長手記」上
	大永6年3月頃	上洛する途中に立ち寄る	三河国→(尾張国)守山→熱田→清須→津島→伊勢国	「宗長手記」下
	大永7年3月26日～4月	駿河へ帰国する途中に立ち寄る	伊勢国→(尾張国)津島→清須→熱田→笠寺→鳴海→三河国	「宗長手記」下
宗牧	天文13年11月および11月	東国へ下向する途中に立ち寄る(朝廷の使者として織田信秀のもとを訪ねることも目的)	伊勢国→(尾張国)津島→那古野→熱田→津島→伊勢国→(尾張国)大野→なな(成岩?)→三河国	「東国紀行」
紹巴	永禄10年3月上旬頃～4月29日	富士一見が主たる目的	伊勢国→(尾張国)茨江→本府→清須→小牧→九坪→番掛→田楽が塚→祐福寺→(三河国)八橋→刈谷→岡崎	「紹巴富士見遊記」
	永禄10年7月7日頃～8月20日	上洛する途中に立ち寄る	(三河国)岡崎→刈谷→(尾張国)小河→(三河国)刈谷→(尾張国)亀崎→(三河国)熊野崎→大浜→刈谷→(尾張国)小河→あふ坂→大野→小倉→熱田→萱津→津島→熱田→大高→寺中→伊勢国	「紹巴富士見遊記」

* 永正十三年から永禄十年までの時期の対象に、連歌師の旅の概要をまとめた表である。典拠の項目に見える史料名のつぎの数字は、『愛知県史資料編 中世3』の資料番号である。

産学官連携先に向けた
アピールポイント

・争乱の時代においても、「古今和歌集」「源氏物語」「伊勢物語」のような古典の習得を前提とする文芸が愛好された事実や、その歴史的背景を明らかにすることは、なぜ、古典が残されたのか?という問いに答えるための素材を提供することになる。